

ねりまの文化財

練馬区教育委員会
社会教育課
(文化財係)
☎3993-1111 内線 7141
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

郷土資料室 〈特別展〉

衣食住の移り変わり

— つまじさとぬくもりを探る —

平成6年5月31日まで 開催中

石神井台一丁目(石神井図書館内) ☎3996 — 〇五六三

ていませう。

いつの時代でも衣・食・住は、人々のくらしの基本であり欠くことのできないものです。今回の特別展では、所蔵民具を手がかりに衣食住の移り変わりを浮きぼりにしました。愛着をもって使用された一つひとつの民具に目を向ける時、人々のくらしの息吹と努力と工夫で生活をつくりあげていった庶民の力強さを感じることが出来ます。衣食住のすべてを紹介することには限界がありますので、次のような視点をもつけ紹介しております。

衣生活では、つまじさの中の装いと洗濯の移り変わりを身近かな仕事着を中心に紹介し

食生活では、食事風景の移り変わりを道具

の変化から追いました。また、正月料理の今昔をハレの食事の風習として紹介するコーナーも設けました。

住いについては、明かりの移り変わりや暖房の移り変わりに焦点化して紹介しています。くらしの基本である衣食住の移り変わりをふり返ると共に、家族のありよう、ぬくもり、絆についてご一考いただければ幸いです。

◎期間中の休室日

毎週月曜日、3/25・4/22・5/27の金曜日、3/22(火)、5/4(水)

平成5年度 指定・登録文化財

区では、平成6年3月17日に次の文化財を新たに指定・登録しました。これにより、指定文化財は13件、登録文化財は91件になりました。

〈指定文化財〉

◎下練馬の大山道道標

◎下練馬の富士塚

〈登録文化財〉

◎増島家薬医門

◎井口家文書

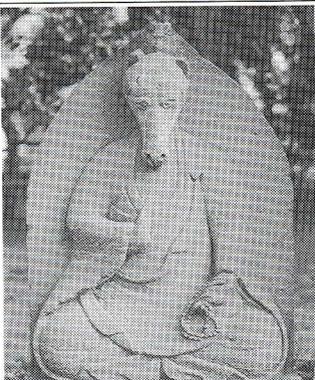
◎比丘尼橋遺跡出土の旧石器

◎絵馬制作

◎僧形馬頭観音

◎金乗院の一石六地藏

◎中里囃子



▲僧形馬頭観音

青梅街道

文化財保護推進委員 井口 敏

練馬区関町を東西に通じる道、青梅街道は、慶長一年(一六〇六)江戸城の大改修にともない建築に必要な石灰を青梅付近の成木・小曹木村などから運ぶため、大久保長安が開いた道と伝えられている。成木街道、江戸街道とも呼ばれたとか。青梅街道は東進して内藤新宿の追分で甲州街道に合流し、江戸城に通じる産業道路である。成木村より江戸城竜の口の普請小屋まで一三里一〇丁(約五二・二キロメートル)、そのうち練馬区関町を通過する距離は約二・七キロメートルである。

慶長八年(一六〇三)徳川家康が征夷大將軍となり江戸に幕府が開かれた。翌九年江戸から各方面へ往還の五街道(東海道、中山道、甲州道中など)が整備されて、日本橋を基点に一里塚が築かれた。五街道は本街道であるが、脇街道の青梅街道も一里塚がつくられ、関町に三番目の塚があったといわれているが、其の場所不明である。出店付近に第三の塚があったとの説もあるが確かではない。

青梅街道沿いの関町の開村は石神井村誌には文禄年間(一五九二〜九五)と書かれ、社会教育課刊の「練馬の神社」には慶長年間

(一五九六〜一六一四)に開村と記されている。竹下新田は天明四年(一七八四)に開村したと新編武蔵風土記稿に書かれている。

江戸時代中頃の青梅街道は「武蔵国豊島郡関村明細控帳」に「当村より江戸は東に当り道法日本橋まで五里半余道筋は遅野井村、荻久保村、天沼村、馬橋村、高円寺村、中野村、成子宿御通り内藤新宿へ出申候」とあり、道中は「関村道筋の儀は青梅道、保谷道、清戸道、小樽道、右大道外作付道之寸九尺道と定置候 且大道筋之寸式間三尺(四・五五メートル)、小樽道九尺右道筋之儀関村拾式筋道に書上仕候」とある。江戸時代の青梅街道の道中四・五五メートルに対し現在の道中は二五メートルに大きく拡がっている。

青梅街道を保谷市東伏見から練馬区関町に入る。この市区境界付近の地名を「棒抗」と呼んでいた。明治の末ごろまで角ぐいが道路の南側に立っていて、江戸日本橋五里半、八王子七里、川越七里等関村からの道のりや方角が表記されていたという。この辺りは豊島多摩、新座三郡の境界でもある。近くの千川上水に三郡橋がある。青梅街道を東へ最初の信号(北裏)を右折し直進すると、千川上水の更新橋脇にお堂があり、安永四年の庚申塔がある。次の信号(慈雲堂入口)の南西方面に不動塚があった。信号の東側の道は関村の

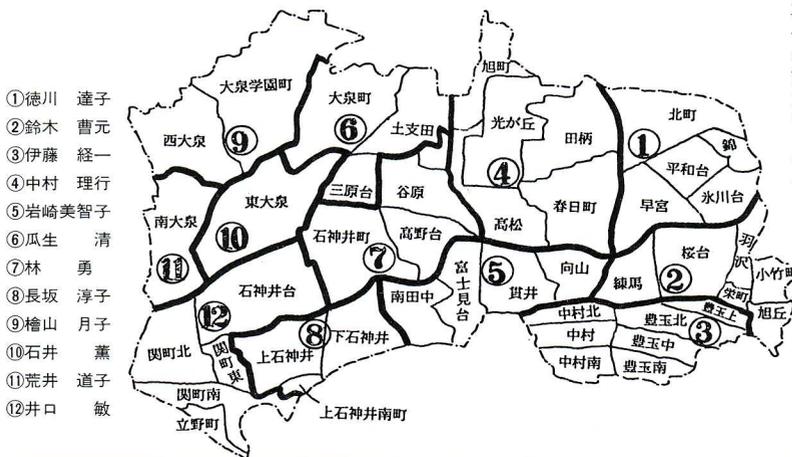
第4期

文化財保護推進員

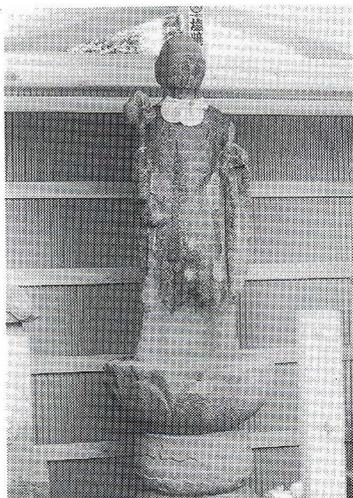
平成6年2月1日付で、練馬区文化財保護推進員12名を委嘱しました。12名のうち10名の方が再任で、徳川氏・中村氏が新たに就任されました。

推進員の方々の活動内容は、担当地域の巡回による各文化財の状況把握や、文化財関係行事への協力などです。

〈担当地域一覧〉敬称略



▷関のかんかん地蔵(関町東1-18)



鎌倉道といわれた古道で、青梅街道から右折すると昨年開所した区立関町特別養護老人ホームがある。更に南へ進むと古道の右側に物見塚があった。この辺りから西の方、関町南四丁目が練馬区で一番標高が高く、五七・八九メートルの地形といわれている。この先千川上水堤に明治四一年の施餓鬼供養塔がある。関町二丁目交差点周辺の地名を角屋と呼んでいた。角屋の南の方に鉄砲塚があった。

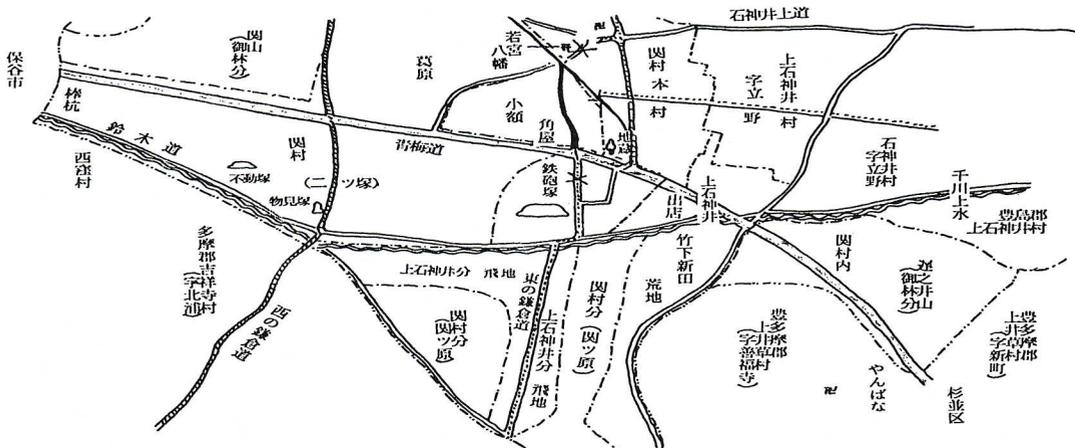
不動塚、物見塚、鉄砲塚を関の三塚という。昭和初期までは塚が残っていた。角屋から東へ二〇〇メートルのところに正徳元年(一七一)の地蔵菩薩立像がある。練馬区登録文化財の通称「関のかんかん地蔵」である。両脇には享保一四年(一七二九)の胎藏大日如来座像と寛保元年の勢至菩薩像がある。かんかん地蔵から一〇〇メートル東の石塚酒店

が、かつては関町の一番東寄りでその東は旧上石神井村出店であった。江戸時代出店は、青梅街道を往来する人々の休憩場所として、大変賑わった。伊勢橋脇の御嶽神社横には、元禄元年(一六八八)の庚申塔、元禄八年の延命地蔵、享保一三年の廻国供養塔等がある。御嶽神社南側に池無弁天堂がある。青梅街道は伊勢橋を渡ると旧竹下新田(関町南二丁目同二丁目)に入る。竹下新田の中間部に村の鎮守稲荷神社がある。一番東寄りの杉並区との境界付近を「やんばな」と呼んでいた。遅野井山(御林)の山端が訛ってこの地名になったとの説もある。「棒杭」「角屋」「やんばな」等の地名は小字小名とは違う。やんばなには享保一四年の開運地蔵尊他がある。

享保の頃は人馬の往来が盛んで街道に団子屋、小間物屋、蕎麦屋、饅頭屋、五場茶屋、酒肴飯を売る店等が出来て、屋号の家が残っている。又昭和初期まで馬の蹄鉄屋、車大工の店等もあった。

現在青梅街道は幹線道路として交通量が大変多く混雑する道路として、自然環境の中では樺やイチヨウの美しい街路樹の道として、人々の生活の中に深くとけこんで使われています。

(参考 『ねりまの道』)



千川上水の斉藤水車

文化財保護推進員 岩崎 美智子

千川通りと旧早稲田通りが交わる北角、南田中一―二には斉藤水車がありました。千川上水に八成橋がかかっていたことから八成水車とも呼ばれていました。

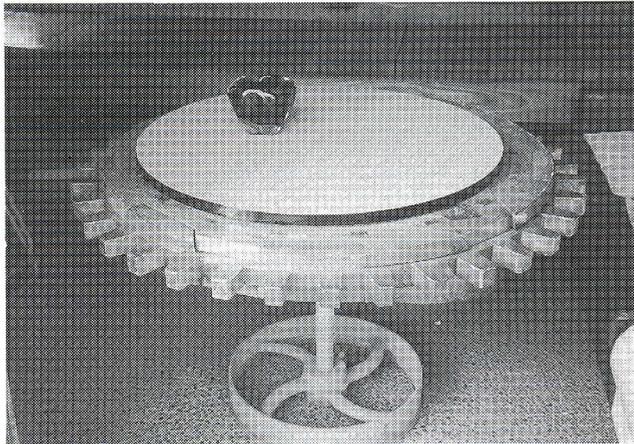
現在もここにお住まいの斉藤泰治さんは、前任者から引き継いだ昭和五、六年頃から昭和三十年頃まで、千川上水から引いた水で(昭和十九年頃から電気に変えました)直径七メートルもある水車を動かして、精米や麦のひき割りや製粉をしていました。

斉藤さんのお宅では、水車の部品を大切に保存したり使ったりしています。水車の歯車はテーブルの上板にして回転テーブルにしています。挽き臼(ひきうす)は靴ぬぎ石にし



▶ 挽き臼の植木鉢

◀ 水車の歯車をテーブルに



ています。挽き臼(つきうす)は植木鉢にしています。

この頃は斉藤さんを訪れる人が増えました。新聞の取材、郷土史研究の人、社会科見学の子供たちです。斉藤さんは、「水車をやっていただくのが大勢の人と交流できる。」と喜んで、親切に説明してくださいます。

ここに千川上水が流れていたことを記憶にとどめ、残された郷土の文化財を大切にしていきたいと思っています。

南大泉めぐり

文化財保護推進員 荒井 道子

大泉学園駅から西へ十分ほどの妙福寺の境内は静まりかえって、冬陽を受けた大木の梢の間から高麗門、仁王門が美しい。落葉しきりの頃も常にはき清められて心の落ちつく寺である。一六六四年作の梵鐘に刻まれた金石文を見上げ、題目供養塔のひげ文字を美しい図柄と思い、草花の絶えない浄行菩薩立像に信仰を感じ手を合わせる。参拝後、平成四年三月に移し変えられた四代目お松塚を見て廻り南へ道をとりに白子川の整地された緑道を辿る。

江戸期この地域農民の恩恵池であり、大正期に子等の水遊びの場であり、昭和四十年代には草の間に小さい池らしきものがあつた白子川の源泉、井頭池も今は見る影もなく、ここで川は太い下水管に呑みこまれ、上は道となって終わっている。西の長亀さん方へ寄り明治期のへいごく(殺びつ)、たくあん小屋を見て話を伺う。

保谷駅への帰途、キャベツ畑にあつた江戸の頃からの屋敷墓が駐輪場が変わっているのを見て、ここにも歴史を感じた。